広報市民リポーターだより No. 7

の独特な色合いを醸し出しています。優美な材質を生かしたその製品の優秀さは、国内はもちろん海外まで広く知れ渡るようになりました。

昭和三年、アメリカのシカゴ市で万国博覧会(現在の国際見本市)が開催された時に、浅井幸之助さんが出品した「果物鉢」が諸外国の人々の目を引き、主催者のシカゴ市から賞状を授与されています。国内でも、曲物の工芸品を生産しているところが数多くありますが、通産省の「伝統的工芸品」として指定を受けているのは、大館曲げわっぱだけです。

昭和六十年代、この地域(大館市・比内町・田代町)全体で、曲げわっぱを製作している企業は二十数社あり、従業員数も二百人を超えていました。しかし、高齢化と後継者不足、あわせてプラスチック製品の普及による曲げわっぱ製品の販売不振が続き、企業数、従業員数も年々減少し、平成十年には産地全体で十三社、百人を割ってしまいました。この一番大きな要因は、原材料である天然秋田杉の不足と高値であると思います。

このような厳しい現状の中で、国有林材、民有林材の八十～百六十年生の秋田杉(造林木)を利用した新製品の研究開発が進められています。また、ここ数年はAターンにより、親の跡を継ぐ人も増えてきています。

【その未来】

昨年六月、通産省は「21世紀の伝統的工芸品産業のあり方・研究報告書」をまとめました。この中で、今後の方向性と展望についての具体的な提言が掲げられておりますので、その主なものをご紹介いたします。

○市場ニーズの適正な把握により製造販売をおこなう「産地プロデューサー制度」の育成強化

○IT(情報技術)の積極的な活用

○学校教育を通じた普及啓発(小、中、高生などへの伝統工芸教育の組み入れ。もの作り体験による心のゆとりと情操教育)

この報告書により、通産省では需要の拡大、人材育成・確保など販売を中心とした流通方面にも力を入れる支援策を検討しているとのことです。これからは使い捨ての時代から良いものを大切に使う時代です。曲げわっぱの前途に明るさが見えています。

おわりに

昭和二十年代までの曲げわっぱは日常生活の一部でしたが、今日の生活事情においては必需品といえるものではありません。また、あの素朴な印象とたたずまいは、決して多くの人の目を引くといったものでもありません。しかし、控えめでやや地味なその外観は飽きにくく、より万人が親しむことのできるデザインといえます。実用性を考え装飾を抑えた曲げわっぱは、まさに「無印優良品」といった言葉がふさわしいと思います。

現在、お盆、弁当箱、茶器などの伝統的製品のほか、コーヒーカップやアイスペールなどの新しい製品も作られています。大館の文化そのものといえる「大館曲げわっぱ」を、誇りをもって伝えたいと思います。

最後になりましたが、このリポートにご助言と資料提供などいろいろご協力くださいました皆様に感謝申し上げますとともに、曲げわっぱ産業のますますのご発展をお祈り申し上げます。

伝統を受け継ぐ浅井幸精さん
(御成町4丁目)

Aターンで活躍する柴田昌正さん
(清水南町)

伝統を守りながら、新製品の
開発に取り組む栗盛俊二さん
(中町)